

## <第49 回研究会>

日時：2004年12月4日（土）13時～17時

会場：立命館大学琵琶湖草津キャンパス

今回のテーマは「ESP 向け e-Learning の実践」であった。代表世話人からの挨拶、報告者の紹介に続いて、5人の先生から実践経験に基づく報告が行われ、活発な質疑応答がなされた。参加者数は、当日参加申し込みの方も含めて19名（内訳は大学教員14名、他（専門学校）教員3名、生協1名、事務局1名）であった。他府県および会員以外からの参加もあったことは、今研究会のテーマに対する需要度の高さを示していると言えよう。



今回のテーマは、ESP (English for Specific Purposes)に焦点をあてたものであるが、ESPとは、「学問的背景や職業などの固有のニーズを持つその専門領域において、明確かつ具体的な目的をもって英語を使用するための言語研究、およびその言語教育」である。ESPは、1960年代に当時英語教育の主流であった文学的伝統に対する反動が次第に高まり、「学習者自身の目標や現実に即したコースを立案し、教授法を考える」といった、より実用的な観点が主張されたことに始まる。理工系英語 (EST: English for Sciences and Technology) 研究がESPの第1歩であり、専門分野別に英語の言語的特徴が記述されるようになった。本研究会では、これまでにESP向け

e-Learning および CALL システムの構築と実践において先進的な取り組みをしてこられた大学の事例を報告してもらい、その効果や問題点を浮き彫りにして議論し、情報交換を行った。

以下、5名の報告者の発表要旨を記載する。（報告者自身によるものを転載）

### 1. 「医学ESP教材開発とCMS/LMS環境下における英語授業」

安浪 誠祐（熊本大学大学教育機能開発総合研究センター助教授）

熊本大学では平成16年度からCMS/LMSの一つである WebCTが全学的な基盤システムとして運用されている。科研費補助による医学部教員及び学生に対してニーズ分析の結果に関する報告と共に、Web上のリソースを用いたWebCTシステムで利用できる医学ESP教材の開発、開発した教材を用いた学習プロセス及び授業展開、そしてWebCTシステムを補完的に用いたCALL授業における個別指導などについて発表した。



### 2. 「遠隔キャンパスの自学自習支援 - 金沢大学工学部の例」

西嶋 愉一（金沢大学外国語教育研究センター助教授）

金沢大学工学部では、大学院入試へのTOEIC・TOEFLの導入に伴い、学部学生に対するTOEIC・TOEFL学習支援が急務となった。これを受けて、外国語教育研究センターで運用しているe-learning教材 (ALC NetAcademy) を、工学部学生全員の利用に供することにした。キャンパスが離れているため、年に数回の講習会、Web掲示板、メールマガジン等を活用して学習支援を図っている。教材のアクセス数のほぼ半分が工学部のものであり、それなりに利用されているようではあるが、発行したアカウント数に対して、実際にログインした者は1割強にとどまっている。今後とも、より良い学習支援の形を考えてゆきたい。



### 3. 「科学技術英語のオンライン学習支援環境構築について」

上村 隆一（北九州市立大学国際環境工学部教授）

北九大国際環境工学部は、学部開設時点から教養科目ではなく、専門科目への導入国際科目として「英語」を位置づけてきた。「科学技術英語の基礎学習」を1・2年次に配置し、3年次で「英語による研究発表」を行わせるといった、技術者養成直結型のカリキュラムを実践してきた。学習到達目標として、「工業英検」3級程度の語彙・文法知識と作文能力を獲得させるべく、オンライン学習環境の整備を進めてきた。しかしなが

ら、科目間の連携が不十分で、取得した英語資格を単位読替えに利用し、必修授業を受講しない学生が増えるなどの弊害が生じている。次年度からのカリキュラム改訂で科目間連携を強化、専門英語の学科特性に応じた見直しを専門学科教員との共同作業で実行することになっている。

#### 4. 「ESPカリキュラム、コアスキルとしてのCALL：科目間の融合と連携」

Michael Shawback (立命館大学理工学部助教)

理工学部のESPカリキュラムで、自作のWWWのサイト'English Expeditions'は授業運営において重要な役割を果たすとともに、学習支援にも重要な役割を果たしている。全必修英語科目対象のオンライン成績管理システムや、必修科目に関連した授業時間内および時間外課題の配信・提出システム等々の機能も備えている。理工学部の学生はコンピュータ・スキルを身につけるのも早く、英語学習にも難なくコンピュータを取り入れることができる。従って、「英語5 CALL」の教室では、貴重な英語の授業時間を基本的なコンピュータ・スキルを身につけるのに使う必要はない。こういった状況から、CALL教室では同時開講されている他の必修科目（「英語4 Listening II」「英語6 Communication II」）の関連課題をコンピュータを用いてこなすことに多くの時間を割くことができる。

学生は、インターネットをリサーチの道具やコミュニケーションの手段、外国語として英語を学ぶ場として使用することを学習するとともに、週替わりで「英語4 Listening I I」関連のリスニング課題と「英語6 Communication II」関連のコミュニケーション課題をこなす。どちらも双方向型課題となっており、コンピュータで自動採点される。コミュニケーション課題はペアワークの形態をとるが、リスニング課題の方は個別課題となっており、学習機能付き教材配信システムにより、前回学習分のスコアをもとに次回使用する教材を自動判定・自動配信する仕組みになっている。これにより、同じ教室内でも個々の学生の力に合わせて学習内容を変えることが可能となっている。

ライティングの指導も一貫してコンピュータ・ベースとなっており、授業時間外に行われる。学生は2週間に一度、作文の課題を与えられ、カリキュラムを履修する4セメスター（2年間）で合計24回、作文課題に取り組む。トピックを課すところから、提出、採点、フィードバック、そして、関連補習課題の配信と採点に至るまで、すべて授業時間外にコンピュータを通して行われる。このように、コンピュータを活用することにより科目間リンクをより強固にでき、学習の相乗効果をさらに上げることが可能となる。同時に、教員は授業時間をより有効に使うことができる。

#### 5. 「情報科学に特化したコンテンツ・ベースのESP CALL の教材開発と実践」

野澤 和典 (立命館大学情報理工学部教授)

2004年度に新設された立命館大学情報理工学部の英語教育カリキュラムに導入されたESP CALL の構築とこれまでの実践結果について報告した。ESP CALLは、必修の英語教育カリキュラムの一部ではあるが、英語での講義による専門基礎共通科目との連携を考えたものである。

そのユニークさや到達目標の高さから様々な問題点もあるが、やや英語が苦手、あるいは勉強不足の学習者にも対応した、より専門分野の学習に役立つ基礎英語を養成するプログラムである。授業中および授業外での学習も要求する英語教育カリキュラムの中のESP CALL について、その基本概念、実践環境とスタイル、情報科学英語の共通テキストと連携した教材開発、Online LMS利用の課題・ミニクイズ・プレゼンテーションを含めた実践とそれらの評価法、学生たちへのアンケート調査（前期分）結果などを簡潔に報告し、関係者に膨大な時間と労力を強いながらも新しい取り組みをしているESP CALL を紹介した。

(文責 吉田 晴世)

